

メルロー=ポンティの知覚論(II)

紺 田 千 登 史

1

拙稿第一部でもみたように、メルロー=ポンティはベルクソンが『物質と記憶』のイマージュ論において知覚の総合的性格を、物心の生きられる総合をみとめているとしてこの著作を高く評価するのであるが、しかし他方、ベルクソン自身はかかる総合をメルロー=ポンティのようにわれわれにとって絶対的なもの、根源的なものであるとはかならずしも考えていたのではないこともこれまたメルロー=ポンティの指摘している通りなのである。つまり『物質と記憶』という書物にはメルロー=ポンティのいわゆる現象学的記述の側面と同時に、かような現象を背後より成り立たしめているものとしての形而上学的なものがほぼ並行する形で考えられている、ということである。すなわち、まず「物質に関する諸学説も精神に関する諸学説も知らず」ただ「わたしが目を開けば知覚せられ、目を閉ざせば知覚せられない」¹⁾ イマージュとしての世界から出発して、それがわたしの身体なる「特別なイマージュ」を中心に遠近法的に展開せられていること、またそれは身体の動作に応じてその様相を次々と変化させていくものであって、この意味で知覚は身体的行動とどこまでも相関的であり、一言でいえば身体の可能的行動として方向性(意味)を担った質的な空間であること、さらに、こうした知覚はかように未来的に世界の様相を展望しゆく一方、それはまたいかに瞬間的なものでも一定の時間的な厚みを有し、したがって記憶の要素を含み、たえずみずか

らの過去を背負いゆくものでもあること(「もはや存在しないものを保持し、いまだ存在せぬものを先取りする」²⁾ 意識の実相は、まず知覚において確認される、というべきであろう)、そうしてかような未来および過去からの情報にもとづいて身体が行動を積み重ねていく中でその内部に形成せられる習慣、すなわち「運動図式」(le schème moteur)³⁾ に応ずる形で知覚は様々に分節せられ、いわゆる個別的な対象よりなる世界、人間的な世界が実現せられてくることなど、知覚と身体との有機的連関を記述的に捉えていこうとする態度は、まさにメルロー=ポンティのいう意味で現象学的というのであろう。しかしながら『物質と記憶』の第一、第二、第三章においてわれわれが読みとることのできるこうしたベルクソンの記述的態度は、実は一貫した格好で現われているものでは決してなく、例えば知覚は「わたしの知覚」として捉えられるとともに、他方、物質的世界全体からの限定として、全体的世界に較べてより少ない(moins)⁴⁾ ものとしても捉えなおされ、知覚はその固有性が排棄せられて全体的世界へと解消せられる傾向が最初からあるし、われわれの知覚の一切が純粹記憶の中に保存せられており、その限定として知覚に投射される記憶心像を考えるかれの記憶論は、物質的世界に対する精神的世界を、メルロー=ポンティのいわゆる「第二の世界」⁵⁾ を想定することにつながるものであって、折角の知覚の現象学的記述がたんなる世界と世界との関係に置き直される余地をつねに残しているのである⁶⁾。そうして事実、第四章や『創造的進

1) *Matière et mémoire* (以下 M. M. と略す。), p. 11.

2) *L'énergie spirituelle*, p. 5.

3) M. M., p. 121, p. 126, p. 135.

4) *Ibid.*, p. 32.

5) *L'union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson* (以下 Union. と略す。), p. 83.

6) Cf. *ibid.*, pp. 79-85.

化』の第三章で『時間と自由』以来の持続の形而上学に立ち戻って、物質を弛緩せる持続、精神を緊張せる持続という形で両世界の統一が考えられるときには、われわれの知覚の現実はその具体性をまったく消失して宇宙的持続の中に埋没してしまわざるをえないのである。こうした形而上学者としてのベルクソンに対してはメルロー=ポンティは、どこまでも現象の立場をまもり抜こうとすることはいうまでもないであろう。ところでかような両者の相違は、おのおのがそれを通じてみずからの考えを主張した科学者たち、とくに生理学者たちの考え方に対する批判を行なう過程でまず明らかになる。この拙稿第二部では、科学者たちの批判を通して顕わになるベルクソンの立場と、そのメルロー=ポンティによる再批判を見た上、メルロー=ポンティ自身の立場を見ていきたい。

2

最初にベルクソンであるが、『物質と記憶』の第一章で知覚が脳においてわれわれの表象に転ぜられるとする考えが退けられて、知覚はまさにその対象が置かれている当の場所で成立している⁷⁾、と述べられている箇所をとり上げてみたい。すなわちベルクソンによれば、生理学者たちは一般に知覚を対象から網膜に伝えられた刺激が視神経を通り脳に達し、そこで何らかの仕方では表象に変えられるものとする。しかるにベルクソンのように素朴な知覚の現実から出発するかぎりでは、脳といえども他のイマージュの中に存在する一つのイマージュにすぎず、したがってかような部分的なイマージュがどうしても他の多くのイマージュを包み込むことができるのか理解できないのである。そうして逆に、知覚は知覚せられるところにあると考えてどうしていけないのか、と問われるわけである。ところでメルロー=ポンティも

ベルクソンのこの部分には大いに関心を示し、その現象学的意義にしばしば言及しているのであるが⁸⁾、しかし注意しなければならないのは、実はここにおいてすでにベルクソンはこうした事態のわれわれにとっての意義にとどまらず、その形而上学的な意義をも同時に念頭におきながら述べている、ということである。なぜなら、知覚せられる限りでの世界はなるほどイマージュではあるが、ベルクソンによればかかるイマージュは客観的世界として存在する物質的世界の中から、われわれの身体的行動に必要な部分がたんに切り取ってこられたものに他ならず、それがわれわれによって選択せられたもの、という側面を別にすればまさに物質そのものを意味するからである。ベルクソンは、身体はあたかも反射鏡のようなものであって、即自的に存在する物質的世界のもろもろの影響の中から身体の自己保存に必要な指示を与えるために、その一部を対象へと逆に反射したものが知覚だ、というようにも説明している⁹⁾。物質の表象 (*représentation*) とその現存 (*présence*) とはさし当っては部分と全体の関係にすぎないのである¹⁰⁾。

しかるにメルロー=ポンティによれば、知覚を考えるさいにこうした客観的な世界を前提にした議論を行なうことが、そもそも問題にされなければならないのである。われわれは知覚にあってベルクソンがいうように、なるほど世界を遠近法的に体験するし、またかように遠近法的な様相においてあらわれる種々の「もの」が決して一つのパースペクティブの中で把握せられているかぎりで存在するものではなく、なおそれをこえた側面をももっていることはみとめなければならない¹¹⁾。しかし「もの」がかように現在のパースペクティブを超える側面をもつのは、われわれの行動の図式としての空間がたんに現在知覚せられている様相に限定されず、さらにそれを超えてはりめぐらされているということであって、当面ベルクソンのように実在論のいう意味で「イマージュは知覚

7) M. M., p. 41.

8) 例えば *Structure du comportement* (以下 S. C. と略す。), p. 215, Union., p. 82, *Signes*, p. 233.

9) Cf. M. M., pp. 31-34.

10) Ibid, p. 32.

11) 「わたしは一つの遠近法的な様相の中に……その様相を超えた「もの」そのものを把える」(傍点はメルロー=ポンティ) (S. C., p. 202)。

せられずとも存在する」¹²⁾ ということまで飛躍する必要はないのだ(メルロー＝ポンティはわれわれの可能的行動としての知覚空間は現実的空間(*l'espace actuel*)と潜在的空間(*l'espace virtuel*)よりなるものとする)¹³⁾。メルロー＝ポンティによればベルクソンは、ここで知覚をまずイマージュとして捉え、實在論と観念論を同時に超えさせる道筋を示しながらも、物質的世界の全体という概念をもち出すことによってふたたび實在論に陥っているのであって、結局かれのイマージュ論は「熟れ損なっている」¹⁴⁾のである。メルロー＝ポンティにとってはしたがって、「即自と対自を媒介する実存の様式たる知覚の優位」¹⁵⁾というベルクソンが途中で投げ出したテーマを追求することがもっぱら問題となる。

ところで、われわれの現実の知覚であるが、もしもベルクソンのように主観の要素をまったく含まない知覚を一方に想定する以上は、後者に主観に属するなにかがつけ加わることによって前者が構成される、というように考えざるをえないであろう。そうして事実、ベルクソンはかような知覚に記憶の混ぜ合わさったものがわれわれの通常の知覚である、と説明するのである。しかも現実の知覚において純粹に物質的なものがかように分離されてしまうと、こんどは逆に知覚における主観的な要素もこれまた純粹にとり出す必要がでてくるであろう。現実の知覚から限りなく主観の要素、すなわち記憶の要素を取り除いていった極限に純粹知覚としての物質があるとすれば、逆にかような知覚より限りなく物質的要素を取り除いていった先に純粹に主観的なものがなければならないことになる。ベルクソンが失語症の検討を通じて、記憶は脳の損傷によってたんに実現の機会を失うのみであって、記憶そのものはいわば純粹記憶として身体から独立に保存されることを主張するにいたるのは、知覚における純粹に物質的なものを想定したことからくる当然の帰結にすぎない。

もっとも、メルロー＝ポンティはベルクソンがこうした純粹記憶をとりに出す過程でおこなった身体に関する考察からかなり多くの示唆をえていることは否定できない。すなわち、ベルクソンの「運動図式」の考え方がこれに他ならない。たとえば、わたしが二人の人物のわたしの知らない外国語による会話を耳にする場合、わたしにとっては両者の話はなんなる音声のかたまりに過ぎないのに、両者は互に相手の音声を子音、母音、音節等に分節されたものとして、要するにはっきりと区別されたことばとしてとらえているのである¹⁶⁾。ところでベルクソンによれば、これはかれら各々が、みずからの身体の中に相手の音声を模倣しながらそれに追隨してゆく機構を備えているがゆえに他ならない。かような機構はむろん言語の習得の過程で漸次身体内に形成せられた習慣の一種ではあるが、しかしそれはたんに受動的なものではなく、人の話に耳を傾けるような場合には、まずかような運動機構が音声の知覚にうながされて緊張し、その分節にみずからを合わせていこうとする積極的な働きをなすものである。ベルクソンが「身体の知性」(*l'intelligence du corps*)とか「身体の注意」(*l'attention du corps*)と呼ぶのはかかる機構がまさにそれ自身に固有な能動性をもっていることを意味する¹⁷⁾。これは対象化して捉えれば「生れ出ようとしている運動」(*des mouvements naissants*)であるが、当事者にとっては「生まれ出ようとしている筋肉感覚」(*sensations musculaires naissantes*)として自覚せられるみずからの自発性の感覚なのである¹⁸⁾。そうして言語の記憶を知覚へと媒介するのもベルクソンではまさにかような図式の働きなのだ。しかしそれでは、ベルクソンにあって身体こそが現実の知覚の主体ということになるのだろうか。しかし先刻みたように、ベルクソンが形而上学者として純粹知覚に対応する形で純粹記憶を考える限りでは、どこまでもこの純粹記憶が真の

12) Union., p. 81.

13) S. C., p. 100.

14) Union., p. 83.

15) Ibid., p. 81.

16) M. M., p. 120.

17) Cf. *ibid.*, p. 122, Union., p. 89.

18) Cf. M. M., p. 121.

主体でなければならないのである。身体が主体であるなどとは形而上学者たるベルクソンにはどうしても容認しがたいことなのである¹⁹⁾。したがって、たとえばベルクソンが注意的再認を説明するさい、われわれはこうしたかれの分裂に直面せざるをえなくなるのである。すなわち注意的再認とは、知覚にもとづく身体の反応がまさに起ろうとするところでそれがいったん禁止せられ、かような生れ出ようとする身体の運動が現実の運動へと発展するかわりに、かえて過去の知覚の想起のための枠組となって知覚—記憶の間に一致が見出されるまでの一種の往復運動である、といわれる。ところでこのさい、いったい身体の側に主導権があるのか、はたまた記憶の側に主導権があるのか、どちらもときめかねるような説明がなされているのである²⁰⁾。身体に主導権があるように見えるのは、当面問題となっている身体行動が先の「生れ出ようとしている運動」として、無力化した過去の中から現在の知覚を照らすために必要なものを記憶心像の形で引き出しにくるようまず述べられているからであるが、しかしベルクソンは同時に、注意的再認にさいしては全記憶が意識に現前し²¹⁾、身体はかような過去の中より表象化さるべきものをたんに透過させ、受肉させるにすぎない受動的な選別装置のようにも述べるのである。こうした注意的再認における全記憶の現前ということにはなにかしら『時間と自由』における純粹持続を想わせるものがあるであろう。ところで、もしもこのあとの立場がベルクソンの真意であるとすれば、結局ここでもかれは形而上学者であり、純粹知覚で実在論者であったかれは一転してスピリチュアリストになっている、といえる²²⁾。運動図式の考え方の中には、身体の現象学的考察といってよいものを含みながらも、現実の知覚において純粹に物質的なものを抽出したように、記憶現象からも純粹に精神的なものを取り出そう

とすることによってかれの現象学的記述は逆に色あせていくのである。

ところでメルロー=ポンティの場合であるが、当然のことながらベルクソンのような形而上学はさし当っては問題にならない。かれのめざすところは、まず現象的世界の独自性をあきらかにすることであり、ベルクソンの結局は認めるところとはならなかった「われわれの有限性の積極的な価値」²³⁾をふたたび見出すことなのである。もっとも、かようにそのめざすところを異にしているものの、メルロー=ポンティが採用する方法においてベルクソンからはなはだ多くのものを学んでいることは否定しえない事実である。すなわちそれは、生理学や心理学の批判・検討を通じてみずからの考えを明らかにしていくというあのやり方である。そうして特に『行動の構造』においては、かれ自身もいちおう科学者の立場に身をおいて、諸々のデータや業績を検討することから、いわゆる心身関係に関する考察を始めているのである。A. ヴェーレンが『行動の構造』の解説で述べているように、『行動の構造』と『知覚の現象学』とは実はまったく同じテーマを扱っているのである。ただ『知覚の現象学』はすでに知覚のわれわれにとっての絶対性・根源性ということについての確信を背景に、ひたすらその記述に努力が払われるのに対し、『行動の構造』はいわばその予備的段階として科学者たちによる心身関係論の批判ということに主眼が置かれているといえよう²⁴⁾。それゆえわれわれもメルロー=ポンティの知覚の現象学的記述の細部に入るに先立って、かれの科学批判から現象学への移行のプロセスをまずふり返っておくことにする。

3

『行動の構造』という書物はその書名も示して

19) Cf. Union., p. 87.

20) Cf. ibid., pp. 83—84.

21) Cf. M. M., pp. 114—115.

22) Cf. Union., p. 89.

23) Ibid., p. 96.

24) Cf. S. C., p. XIII, なお『知覚の現象学』においても、科学的業績と無関係に論じられているわけでは決してないが、A. ヴェーレンも指摘しているように、ここでメルロー=ポンティが触れているのは、おおむねかれの知覚論の記述を補う実証的なデータにかざられている、といえる。

いるように、有機体の行動には一定の構造をもった形ないし図式が存在していることを述べようとするものである。そうしかような形や図式は、有機体は無機物を扱う場合と同じように諸要素のたんなる組み合わせでもって考えていこうとする機械論的な思考方法によっては決して捉えることができない、まさに有機体に特有な原理であって、反射行動、知覚的行動をとわず、あらゆる有機体の行動にみとめられるものであることが明らかにされるであろう。

すなわちまず反射行動に関しては、古典的なみずから機械論を標榜する反射理論はもとより、シェリントン(Sherrington)らの現代の生理学者たちの考え方の中にもなお機械論的な側面の残っていることが指摘される。すなわち反射行動を理解するにさいして重要なのは、いわゆる刺激である。ところで古典的な考え方からすれば、刺激を受ける有機体の各部位が反応を決定するのであって、反応はその部位の有する固有な性質にもとづくことになる。しかし、これは観察される事実とはほど遠い仮説であるにすぎない。なぜなら例えば刺激の有機体の一定部位に加えられる強さが徐々に増大していく場合をみると、有機体はそれによって刺激の連続的な拡散を示すような反応はせず、むしろ刺激が一定の強度に達するごとに運動器官の中でそれぞれたがいに異質な新しい反応を起こすという具合である²⁵⁾、また反射の形態は各生物において一般に数が限られており、刺激の実質的な内容が変わっても時間的、空間的に同じ「形」のものであれば同種の反応を示す、というようになっているからである²⁶⁾。ところで有機体の反射がこのように刺激の場所にもとづくよりも、その「形」に依存するということはいったいどのように理解すべきであろうか。メルロー=ポンティによれば、それはまさにデカルトの機械論が客観的世界を確立するさいに否定した「価値や意味」²⁷⁾の観点をもう一度とり戻さなければなら

ない、ということなのである。メルロー=ポンティは有機体はある意味でピアノのようなものであるという。もっともピアノはみずから動くということはないが、有機体の場合は物質的世界を環境として受け容れるさいに自己保存に必要な刺激に対する感受性を同時に備えていくものであって、ある刺激のそれ自身は単調な変化しか示さぬ影響に対し、みずからの選んだ音を次々と、そしてときにはリズムを変えながら演奏するようにできているのである²⁸⁾。換言すればわれわれのいわゆる刺激は外部より受動的にとり入れられる影響のたんなる結果というようなものではなく、それ自身すでに「状況の意味」²⁹⁾に対する有機体による最初の適応であり、応答だということである³⁰⁾。

しかし刺激がこのようなだとすると、それでは有機体の反応、すなわち反射の仕組みそのものはどう理解されるのであろうか。古典的な考えによれば、上のように刺激を受けいれる部位に固有な感受性にもとづいて有機体の解剖学的な要素が変化し、かような要素的な変化の総体としてそのつどちがった反射回路が成立するとされるのであるが、これはもとより前提が誤っているので問題にならない。しかしシェリントンのように刺激-反応の回路をいくつかの孤立した系に分類して理解しようとする仕方はどうであろうか。外部刺激受容知覚系、内部刺激受容知覚系(臓器の感覚)固有受容知覚系(運動、体位等の感覚)の区別ははたして適切な区別であろうか。しかしメルロー=ポンティによれば、たとえば純粋な外部受容知覚系などは存在しないことがわかるのである。なぜなら「あらゆる反射は有機体の内部にあって反射弧の外部に存在している多くの条件の協力を必要としているのであって、かような条件は、いわゆる刺激と同様、反応の原因と呼ばれてもよいものである」からである³¹⁾。たとえばまず反射は一定の刺激の予想される効果を抑えたり、反対のものにしたりさえする化学的な諸条件、すなわち分泌

25) Cf. *ibid.*, p. 25.26) Cf. *ibid.*, p. 9.27) *Ibid.*, p. 8.28) Cf., *ibid.*, pp. 11-12.29) *Ibid.*, p. 94.30) Cf. *ibid.*, p. 31.31) *Ibid.*, p. 15.

および植物神経系のもとにあるし、さらに大脳や小脳の働きまでが、あらゆる反射の条件として介入してくるようだからである³²⁾。

要するに有機体にあつてはいかなる部分的変化といえども、つねに全体にその影響が及んでいる、といえるのである。「ショック状態」は大脳に固有なものとせられるいわゆる禁止装置や脊髄神経の切断など、有機体の部分的な変化が発端であっても、その影響が有機体の行動の全体に及ぶ典型的な例として挙げることができる³³⁾、また逆に有機体の一見部分的な反応とみとめられるものでも実際には有機体全体に広がる神経や運動機構の全般的な状況によってきまっていることが分かるであろう。例えばゴールドシュタイン (Goldstein) の実験によれば、通常の姿勢では足の筋肉の弛緩を示す被験者が、膝をまげたり、腹ばいにさせられたり、あるいはたんに頭を動かすようにいわれただけでかような反射を示さなくなる、ということがあるからである³⁴⁾。さらに例えば手の屈伸の動作にしても、いわゆる「反射の合成」として、すなわち伸びる筋肉の側で起きていることが反対の側で生起することがらを決定するとか、あるいはその逆であるとかいうように解して、あたかも手の裏と表で本来別々にある筋肉の組織が相互に反対側の筋肉を規制 (innervation) ないし禁止 (inhibition) するというような形での説明は、なるほど電気的な刺激などによる人為的に作り出された状況での反応には合致しても、現実の具体的な状況の中で生活する有機体のしなやかな動作の説明にはならないのである。なぜならメルロー=ポンティによれば「手のこまやかな運動、あるいはものを把む動作をとりあげる場合でさえ、対立する筋肉組織の同時的な規制がみとめられ、かような規制の配分は到達すべき目的、遂行すべき運動の型にもとづく」³⁵⁾ からである。刺激を受け容れる仕方に有機体は一定の形式を示すように、反射そのものも有機体の全体にかかわる意味を担った行動の形式という観点からまず理解されなければならないのである。

刺激に対する有機体の直接的な反応としての反射行動に関するメルロー=ポンティの見解の概略は以上になると思われるが、しかし、こうした反射行動より優れていると見なされる知覚を介した行動はどう理解されるであろうか。メルロー=ポンティはこの問題に入るに先立って、現代の生理学に重要な足跡を残したパブロフの批判から初めている。そしてかれのパブロフ批判のめざすところは、その底に根を下している「原子論的要請」³⁶⁾をあばき出すことにある。

パブロフの条件反射の理論は、知覚にもとづく行動を反射に還元して理解しようとするものである。いいかえれば、知覚の段階になると有機体の環境は、上でみたような有機体に対する直接的な刺激を通じて作用を及ぼす環境よりもはるかに広く、豊かなものへと拡張されるのであるが、パブロフではかかる拡張は、もっぱら自然的な刺激 (パブロフの実験では犬に与えられる食物) の新しい刺激 (例えばある種の光) への、絶対的な無条件刺激から、いわゆる条件刺激への置きかえによって説明されるのである。そして一たん条件刺激となった刺激 (光) が一度ももとの絶対刺激 (食物) と結合されたことのない刺激 (たとえばベルの音) と結合されると、この刺激も一定の刺激を生じるようになるであろう。もっとも、条件反射はかならずしもこのように一方的に拡張されていくものではなく、条件反射の形式を抑制する原理もそこには同時に働いている、ともいわれる。上の拡張の原理として「拡張の法則」(loi d'irradiation) を主張する一方で、パブロフが「禁止の法則」(loi d'inhibition) として主張するものが、この抑制の原理なのである。これは有機体の環境に対する適応や選択とみえるものを説明するため、パブロフにとっては非常に重要な原理となる。そうして実験的にも最初に条件刺激となった刺激 (光) からさらに同様な反射を引きおこすべく結合された刺激 (ベル) は、実はひとたび条件刺激となっても微弱な効果 (パブロフはこれを唾液の分泌量によって測定した) をもつにす

32) メルロー=ポンティの挙げているデータについては Cf. *ibid.*, p. 16.

33) Cf. *ibid.*, p. 17.

34) Cf. *ibid.*, p. 19.

35) *Ibid.*, p. 21.

36) *Ibid.*, p. 64.

ぎず、しかもそれもまもなく消失する、という事実がみとめられたのである。いな、それどころか、この二つの刺激の組み合わせがいくども反復せられると最初の条件刺激が後の刺激とともに与えられる場合には、まったく反応を起さないという結果が出たのである。そうしてパブロフは、これは後者が前者に対する条件禁止になったからだ、と説明する。さて、いまここにもう一つの刺激（たとえばメトロノームの音）をさらに第三の刺激としてつけ加えてみた場合、事態はどのように変化するであろうか。パブロフの実験によれば、このとき第一の条件刺激のみによる場合の約半分程度の反応（唾液の分泌量）がふたたびみとめられたのである。そうしてこのことをパブロフはこんどは、いったいどんな刺激でも習慣的な状況の中にもたらされると一定の禁止作用として働き、第三の刺激もまずそのようなものとして作用するのであって、第一の条件刺激に対して否定的に働くとともに、第二の条件禁止に対しても否定的に、すなわち禁止の禁止として働くからである、というように説明するのである。

ところでこのようにして、三つの刺激の間に一定の関係を人為的に作りあげた上、あるいはそれぞれを単独に、あるいはそのうちのいずれか二つを、また三者全部をそれぞれが条件刺激へと形成せられた順に与えられる場合を比較してみると、実はそのつど各刺激はもはや自己同一性を保っているとはいえぬような特異な作用を示したのである³⁷⁾。つまり単独に刺激が与えられたり、他の刺激と組み合わせられて与えられるそれぞれの場合にあって、各刺激にその特性が変化したとしか考えられない反応がでてきたのである。しかるにパブロフは、これらの刺激のそれ自体としての恒常性をどこまでもまもろうとし、したがってかようにあらかじめ予想されていた反応と実験結果とのちがいを説明するために、パブロフはさらに別の要因の干渉を考えざるをえなくなるのである。すなわちそれは大脳における反射機制にかかわる部位の隣接関係にもとづく禁止の「相互誘発」ということであるが、しかし、メルロー=ポンティに

よればそれはたんに「想像された生理学」³⁸⁾にすぎないものであって、決して生理的な事実として確認されているものではないのだ。しかしメルロー=ポンティにとってもっと問題なのは、なぜパブロフがこのような一つの仮説で説明できないことが生じるごとに、別の仮説を立てていかなければならないのか、ということである。結論からいえばそれはパブロフには、そもそも最初から事実を統一的に理解するための観点が欠けていた、ということなのである。そうしてその観点とはいうまでもなく有機体に固有な有意味的行動という観点である。例えばパブロフの条件反射理論によって有機体の行動を考えていくとき、いくども有機体にとって幸運な結果をもたらしたものが漸次条件刺激となる、ということになる。しかし動物実験によれば、動物はいくつかの障害が設けられたケースの中で目的、たとえば食物のあるところに達するまでは、なるほど種々の試行をなすことはあっても、いったんそこにいたる通路を発見すれば、次からは迷うことなくもっぱらこの通路を通っていかうとするのである。また何らかの苦痛を受けるように設定された通路は、たった一度の経験で以後は避けようとするのだ。したがってメルロー=ポンティにとってはパブロフとは逆に、ある刺激が一定の反応を喚起する条件反射となるのはなによりもそれが有機体にとって価値的であるか、反価値的であるかということにもとづくことになる³⁹⁾。そして、ここで問題にしなければならないことがあるとすれば、それはむしろかような目的遂行のために採用される行動の様式「行動の構造」なのである。

4

すなわち反射行動がすでにそうであったように知覚的行動にも実は一定の形がみとめられる、ということである。メルロー=ポンティはベルクソンが失語症などの研究を通じて「運動図式」の存在を明らかにしたように、ゲルプ (Gelb) やゴ

37) この点に関するデータは Cf. *ibid.*, p. 57.

38) *Ibid.*, p. 63.

39) Cf. *ibid.*, p. 104.

ールドシュタインらの病理学者の研究にもとづいて、この「運動図式」の有する重要な意義を徹底的に明らかにしようとしている。そうしてこれもまたベルクソンに倣って、大脳に損傷をこうむったために、行動に特異な変化を示すようになった患者たちの症例に注目して、脳の組織とその機能の研究からはじめるのである。すなわち、かれがまず注目するのは「損傷はそれが部分的な場合でさえ、行動の全体にかかわる構造の混乱の原因となりうるし、また類似した構造の混乱が皮質のそれぞれ異なった場所に位置づけられる損傷によって引き起こされる」⁴⁰⁾ という一連の事実である。ところでメルロー=ポンティがここで行動の構造といているのであって、決して損傷によって失われた内容を問題にしていなことに注意を向けなければならないであろう。これは実は従来の精神病理学の伝統に対するゴールドシュタインらの新しい見解にもとづいているのであるが、身体の行動の主体としての意義を明らかにするという見地からメルロー=ポンティもこれに同調するのである。すなわち、例えば失語症の患者の場合、伝統的なやり方に従えば患者が話したり、理解したり、書いたり読んだりできるかを検討したり、あるいはかような能力から考えるやり方がうまくいかない場合には、こうした能力をそれらに対応すると考えられる「表象」にまで還元して、いわゆる言語表象の混乱にもっぱら注意を向けなければならないのであった。しかし、失語症はどんな場合でもこうした症状以外に他の様々な症状の付随するのが普通であり、したがってそのつど、あるいは補完的な損傷が考えられたり、あるいは根本的と考えられる言語表象の破壊より派生したものというように決定的な回答が与えられぬままに過ごされていたのである。ところで、こうしたことになるのはゴールドシュタインらによれば、実はかれらが一つの重要な点を見逃しているからなのである。すなわちそれは「症状とは環境が提出してくる問題に対する有機体の一つの回答だ、とい

うこと。したがって症状の一覧表は有機体に課せられた問題とともに 変化する」⁴¹⁾ ということである。言語表象の理論は行動を実際にみとめられる要素に分析している限りでは、なるほど事実 に即しているとはいえるのだが、しかしそれが要素をその属している文脈から切りはなして考えている以上、抽象的といわざるをえないのである。「通常、有機体は端的に環境の一定の側面に無関心になったり、また一定の運動能力を喪失するなどということはなく、たとえば失語症や失行症の患者はある種の言語活動や実際の行動がそれらが具体的な感情をともなった文脈の中に位置づけられるか、あるいは[実験におけるように]無償のものであるかにしたがってできたりできなかったりするものなのである」⁴²⁾。しかしそれではかれらにはいったい何が本質的に欠けているのであろうか。それこそまさにベルクソンの「運動図式」であり、ゲルプやゴールドシュタインらのいわゆる「範疇的態度」(attitude catégoriale)⁴³⁾ すなわち、ある一つの観点から行動の対象や言語を一つの範疇の代表として把握する能動性であり、現在問題になっている事柄を当面、行動に無関係とみなしうるため、背景に退いた多くの事柄を「場」とする「形」として把える知覚におけるいわゆる「構造化作用」(structuration)⁴⁴⁾であり、そうしてやがて「身体的図式」(le schème corporel)⁴⁵⁾とよばれるものがこれに他ならない。こうした患者たちは普通、状況のいちいちの細部にあまりにもとらわれすぎたり、反対にまったく無関心であったりするのであるが、しかしいずれの場合でも同じ欠陥、すなわち状況を「場」と「形」に分けるという通常の知覚能力を欠いているのである。

しかし、それでは状況を構造化するこうした能力と患者たちのこうむったといわれる大脳皮質の部位との関係はいったいどうなるのであろうか。対応ということからいえば「構造化作用」はいちおう皮質の中央部と深い関係があるようなのであ

40) Ibid., p. 66.

41) Ibid., p. 67.

42) Ibid., p. 68.

43) Ibid., p. 68.

44) Ibid., p. 72.

45) *Phénoménologie de la perception*, p. 114, p. 117.

るが、ただ生理学者もいうように、かかる能力が損傷によって影響を受ける場合、その個所によるよりも、むしろその広がりによっているようなのである⁴⁶⁾。身体の周辺部より中枢にいたる神経組織においてなら、ほぼ一定の行動と一定の神経組織との一対一対応がみとめられるのであるが、しかし中枢となるとそれは解剖学的にいっても周辺部から多数の神経が集まって一つになる場所であるし、ここではむしろその全体がそれぞれのケースに応じた対応をなしている、と考えた方がより事実に近いようなのである⁴⁷⁾。メルロー＝ポンティは「中枢の神経組織は、一定の反応に一定の道具が装置されているといった実質的な内容をもつものでなく、[そのつど] 質的に違っているにもかかわらず一定の過程が展開される劇場のようなものであろう」⁴⁸⁾とも述べている。ここでは損傷部分の位置が多少変わっても臨床上あらわれる症状にさして変化がみとめられなかったり、また逆に一つの損傷が行動の構造に及ぼす変化は決して部分的ではなく、むしろ全体的な変化となつてあらわれたりするものが一般的なものである。

もっともこういわれるからといって、中枢に分業らしいものがまったくないなどと速断してはならないであろう。大脳後部の外鳥距の視覚に関係する部位に近いところでは、とくに知覚と対応し、前部は言語活動に関係しているらしいことはこれらの部位に損傷をもつゴールドシュタインの患者Sやヴェルコム(Woerkom)の患者の例に照しても明らかなのである⁴⁹⁾。それぞれの部位は症状に何らかの意味をもっていることもたしかなようなのだ。ただし問題はその意味がいかなる性質のものか、という点にある。上にのべたように周辺部の神経組織とちがって皮質部分の神経は刺激のいちいちの内容の受容器官としてあるのではなく、むしろ状況を構造化することにかかわっているようなのである。それゆえ皮質が各部分において分業を行なっているといっても、かような内容に対応する形での分業とは考えられない。結論か

らえば、それらはむしろかような内容の構造化の働きにおいて専門化せられている、ということである。しかもそのさい、かような分業は中枢が全体としてかかわっていると考えられる機能と切り離しては考えられないのである。すなわち、例えば視覚にかかわる部位の損傷はたしかに視覚の障害を引き起こすのであるが、障害を具体的に調べてみると、それは他の失語症などと共通にいくつかのまとまりを一瞬のうちに把握するか構造化の能力をも同時に欠いていることが分かるのである。ところでこの後者の能力であるが、これは視覚の障害によるものであるとはただちにいうことはできない。なぜなら、かような損傷による知覚の障害は決してそれによって元通りの機能が復原されるものではないとはいえ、他の部位の働きによって補充されることがあるからである。例えばゴールドシュタインの患者らの場合、視覚にもとづく同時的な直観は触覚の継時的な所与にもとづいて代替されるのである⁵⁰⁾。もしも損傷を受けるよりも以前に視覚にかかわる皮質部位の働きが他の部位の働きからは独立に行なわれ、そうして結局、大脳皮質全体にかかわる働きがかような各部位の有する機能の総和でしかなかったとすれば、このような代替は考え難いことであろう。メルロー＝ポンティは、むしろ皮質全体にかかわる働きとして「構造化作用」があり、これが例えば視覚におけるいくつかのまとまりの同時的な直観を条件づけている、と考える。換言すれば、視覚にかかわる部位の損傷がこうした同時的な直観を危くするのは、中枢全体が正常な場合に行なわれる働きからそれにもっとも適合した道具を奪いとるがゆえである、と考えるのである⁵¹⁾。

しかしながら、かように「構造化作用」を皮質全体の中にみとめるとしても、前者を後者の結果と考えるかぎりには、いわゆる原子論的な立場をたんに修正したにとどまる、とメルロー＝ポンティはいう。たしかに「要素ないし内容の並行論」にたいして「機能的ないし構造的並行論」を打ち

46) Cf. S. C., p. 75.

47) Cf. *ibid.*, pp. 80—81, p. 102.48) *Ibid.*, p. 75.49) Cf. *ibid.*, p. 76.50) Cf. *ibid.*, p. 78.51) Cf. *ibid.*, pp. 78—79.

出したことは、現代の生理学者たちの功績である⁵²⁾。しかしメルロー=ポンティによれば、かれらの大部分は機能をあくまでも器官の主導のもとにおき続けているのであって、その限りではかれらはみずからの提出した問題の重要性にまだ十分気づいていないのである。メルロー=ポンティは、むしろ機能が器官を決定すると考える方が事実には忠実ではないか、というのである⁵³⁾。

メルロー=ポンティはこうした考えを明らかにするために、生理学者らの「統合作用」(integration) ないし「調整作用」(coordination) なる概念のあいまいさを批判することから始めている。すなわち「統合作用」や「調整作用」は普通、中枢において想定される連合回路 (des circuits associatifs) の働きとして示される。例えば一つの対象を知覚する場合、両眼の網膜に映じる像には多少のずれが存在するわけだが、しかし、われわれはこれによって二つの対象を知覚するわけではなく、どこまでも一つの対象として、しかもこれを立体的にとらえるのである。ところがピエロン (H. Piéron) のような生理学者はその理由を二つの網膜から伝えられる二つの刺激が、かの連合回路で統一されるがゆえである、と考える。しかし、もしもそうだとすると、対象の両眼の網膜における二つの像のそれぞれに対応する部分が一つの連合回路で重ね合わされるとともに、他の部分は他の回路で重ね合わされるといった具合に説明していかなければならず、さらにまたこうした連合回路の各々をふたたび統一するような高次の回路をというように果てしなく進んでいかなければならなくなるであろう。しかし、事態がかように複雑になるのはそもそも器官から機能を考えようとするかれらの前提が間違っているからなのである。われわれはむしろ機能はそれ自身の積極的な実在性をもつと考えなければならない、とメルロー=ポンティはいふ⁵⁴⁾。今の例でいえば、対象の各部分の特質は実は対象を一なるものとして把握する知覚全体の構造化作用が要求するところによって各連合回路に配分される、というこ

とである⁵⁵⁾。

ところで、かような機能の器官に対する優先ということは色彩の把握や言語活動ということを考えてみても同様に明らかになる。最後にベルクソンとの比較ということもあるので、これらのうち特に言語についてメルロー=ポンティが語っているところをとりあげておきたい。

すなわち例えばピエロンによれば、言語活動は上の対象の知覚におけると同様、もっぱら言語中枢の「調整作用」にもとづくものとされる。そうしてこの中枢では一つのピアノで無数のメロディーが演奏できるように様々な言語活動はすべてここで行なわれることになる。しかもピエロンの場合、ピアノは比喻以上であって、例えば一定の語にはそれに対応するキイが中枢に存在し、それゆえ例えば錯語症の場合には中枢におけるキイの配置の空間上の近さということで語の混同が説明されるほどなのである。また皮質が損傷をこうむった場合、一定の言語が選択的に消失するのではなく、もっとも自動化されていないものからもっとも自動化されたものへという形で、言語活動全般にわたる機能の減退が起こるのであるが、かれはこの場合でもなお大脳皮質の各部位に言語を位置づけようとする態度は変えない。しかしメルロー=ポンティによればこうした考え方は実ははじめの言語中枢はいかなる言語活動のケースにも対応するとしたピエロンの主張と矛盾するものなのである。なぜなら、このあとの議論にしたがうかぎり、言語の構造はあらかじめ決定されていることになるし、言語中枢とは結局、かようにすっかりでき上った機構のたんなる貯蔵所ということになってしまうからである。しかし自動機構はいかにそれが複雑化しようとも、またしたがって各語に対応しうる回路の数がいかに増えようとも、そのつどそれが置かれる千差万別な文脈に対応しうるとは考えられないのである。またかりにいまそうした主張をみとめるとしても、例えば次々に話されていく語がそれぞれのキイをどうして間違えることなく叩いてい

52) Cf. *ibid.*, p. 83.

53) Cf. *ibid.*, p. 44, p. 88.

54) Cf. *ibid.*, p. 97.

55) Cf. *ibid.*, p. 88.

くことができるのか、ちがった語でも語頭の音素の同じものは数多く存在するし、同音異義語の場合は音素がまったく同一のものである以上、大変に難しい説明をしなければならなくなってしまう。しかし、これは先の対象の知覚を説明する場合と同様、いわゆる「調整作用」を皮質の要素的な働きの組み合わせで説明しようとすることの当然の帰結にすぎない。メルロー=ポンティによれば語はむしろ、ちょうど一つのメロディの中における各音が全体の流れの中に位置づけられ、各音があらかじめもっておらず、しかもそれらを一つひとつ結合していくなにかを表現するように⁵⁶⁾、各状況に応じた文の中に位置づけられているというべきであって、同じ語であっても厳密に言えば、そのつど質的に違った意味を担っているのである。文は決して自己同一的な語の組み合わせなどではないのである。そうしてもしもここでもなお「調整作用」をいおうとすれば、それは上とはまったくちがった種類のものとならざるをえない。すなわち、それはもはや諸項のあらかじめ含んでいる素材的なものには一切負うところのない「意味の統一」⁵⁷⁾一定の関係を創造する働きそのものなのである。

5

さて以上、反射の段階においてさえ、すでに有機体は単なる機械的な反応を示さず、かえって有機体の自己保存という観点から神経組織全体にかかわる働きの中で意味づけられ、構造化せられた運動として顕現するものであること、また知覚を介した行動を理解する場合でも、パブロフのようにこれをたんに機械論的に解された反射の延長上に考えるかぎりでは、知覚の正しい理解にはなっていないこと、それよりもむしろ、反射が意味づけられた運動と解されたのと同様、ゴールドシュ

タインらの知覚を有機体の行動の指針、すなわち世界の構造化の働きとした立場を支持しなければならないこと、しかもかような機能は脳などの器官の結果というよりもかような機能こそが器官を決定しているように見える、ということなどは『行動の構造』の順序にしたがってみてきた。しかしメルロー=ポンティはここまでは終始生理学者らと同じく客観的にとらえられた有機体から事柄を見てきているため、有機体は機械論的な把握の仕方ではとらえることのできない特別な原理をもつといういわゆる生氣論の主張以上に出るものではないようにも見える。特に機能の器官に対する優位を主張する場合、機能と器官とをいちおうにもせよ切り離して考えるかのごとき叙述がなされているのである。しかし、メルロー=ポンティは自分の真意がそこにあることをベルクソンを依然「洗練された生氣論」⁵⁸⁾にすぎないものときめつけることによって、同じこの書物の中でも明らかにしようとしているのである。すなわち、メルロー=ポンティはベルクソンが有機体をその物理・化学的な側面と進化の原理であるエラン・ヴィタルとの二元の総合として成り立っているかのごとく述べる『創造的進化』をとり上げて「有機体はその座となっている物理・化学的な作用は、環境の物理・化学的な作用から抽出することができない以上、こうした連続する全体の中からいかにして有機的な個体の範囲を示すのか、またエラン・ヴィタルの影響範囲をどこまでにするのだろうか」⁵⁹⁾と問うのである。また「物質は頽落する生命であるといってみても、頽落する生命とみずからを創造する生命との関係は同様に理解できないことである」⁶⁰⁾ともいっている。換言すればメルロー=ポンティのいわゆる機能とはむしろ「もの」でも「観念」でもないもの⁶¹⁾、また逆にいえば「もの」であると同時に「観念」でもあるもの⁶²⁾、われわれの知覚的経験においてまさに内から自覚せられる身体をいうのである。またわ

56) Cf. *ibid.*, p. 96.

57) *Ibid.*, p. 96.

58) *Ibid.*, p. 171.

59) *Ibid.*, p. 171.

60) *Ibid.*, p. 171.

61) Cf. *ibid.*, p. 138.

62) Cf. *ibid.*, pp. 20-21.

れわれが自身や生物において観察しうる行動は、まずそれぞれの種に固有な構造をもったものとして現われるのであるが、メルロー＝ポンティにとってはかような行動の主体こそ真の有機体なのである。かような行動はわれわれの身体の反射がそうであるように、種の環境に対する適応が具体的な状況の特質に対してよりもむしろ一定の「形」をもった刺激に対して反応するような仕組みになっているため、実質的に有効であろうがなかろうが同じ反応を反復することしかできない無脊椎動物たちの折衷（*synchrétique*）行動⁶³⁾から、ねずみやチンパンジーなどの目的への信号として様々な具体的な事物を媒介に自己保存の欲求を満足させることのできる兌換（*amovible*）行動⁶⁴⁾、また自己の身体の現実の位置をいったん非現実化

（*s'irréaliser*）⁶⁵⁾し、対象と自己との関係を相対化することによって対象および自己を記号を介して客観的にとらえることのできるわれわれの象徴（*symbolique*）⁶⁶⁾行動までの三つに大別できであろう。しかし大事なことは、これらはいずれも世界を環境として意味的にとらえる主体としての有機体ということを抜きにしては理解できないということであって、たんに客観的世界における客観的身体の運動ではないということである。意味を担った行動の主体としての有機体は諸要素に分析することによってその本質が見失われざるをえないもの、記述的にしかとらえることのできないもの、そしてそのような意味でまさに「現象的身体」⁶⁷⁾なのである。

63) Cf. *ibid.*, pp. 114—115.

64) Cf. *ibid.*, pp. 115—130.

65) *Ibid.*, p. 137.

66) Cf. *ibid.*, pp. 130—133.

67) *Ibid.*, p. 169.